

米國山莊記

分館

鶴見祐輔

鶴見祐輔選集

米國山莊記

太平洋出版社刊

製 復 許 不

昭和二十六年十二月二十日 印刷  
昭和二十六年十二月二十五日 發行

定價 二五〇圓  
地方賣價 二六〇圓

著 者

鶴見祐輔

發 行 者

東京都千代田區內幸町二ノ三  
幸ビル

天田幸男

印 刷 者

東京都文京區音羽町三ノ一九  
益子恒義

印 刷 所

東京都文京區音羽町三ノ一九  
豐國印刷株式會社

東京都千代田區內幸町二ノ三  
幸ビル

發 行 所

株式會社

太平洋出版社

電話銀座(57)六五〇八  
振替東京一九一七九二

# 目次

## 米國山莊記

|         |    |
|---------|----|
| 夏の味     | 二  |
| 田舎道     | 五  |
| 小説家の家   | 九  |
| 活動の福音   | 三  |
| 犯罪討伐運動  | 一六 |
| 親日家いろく  | 一九 |
| 映畫印象文   | 三  |
| 一等賞     | 二六 |
| 朝食の後    | 二九 |
| 聯盟の夜討   | 三二 |
| 短篇小説の失敗 | 三六 |
| 家から家へ   | 三九 |
| 日本留學論   | 四三 |

村一番の運轉手……………四七

法隆寺より新し……………四〇

排日移民法……………四四

結婚線……………三七

白人保存論……………六〇

笑話博士……………六四

蟻の一家……………六九

若草の上……………七〇

サムとドリ……………七三

奇妙な手紙……………七六

人間分類……………八〇

大豫言……………八三

概念の役……………八六

吃のクテイ……………九〇

自動車是非……………九三

細骨夫人……………九六

|    |     |    |     |
|----|-----|----|-----|
| 氷  | 人生  | 捕  | 100 |
| モル | モン  | 宗  | 104 |
| 豫  | 言   | 者  | 107 |
| 盲  | 信と猛 | 進  | 110 |
| 和  | 蘭   | 情調 | 112 |
| 二  | 代   | 目  | 117 |
| 藤  | 棚   | の  | 120 |
| 道  |     | 樂  | 122 |
| 秋  | の   | 夜  | 127 |
| 小  | 鹿   | の家 | 130 |
| 獨  | 身   | 者  | 132 |
| 手  | 製   | の  | 137 |
| 雪  | 來   | る  | 141 |
| 一  | 見   | 舊  | 142 |
| 知  |     |    | 143 |
| 砂  | 原   | の  | 146 |
| 上  |     |    | 147 |
| 英  | 國   | 最  | 151 |

## 北米横斷飛行

|        |     |
|--------|-----|
| くらがりの中 | 一五四 |
| 馬の先生   | 一五八 |
| 滿地の楓葉  | 一六一 |
| クエーカー  | 一六四 |
| 國際精神   | 一六七 |
| 次の世界大戰 | 一七〇 |

|         |     |
|---------|-----|
| 南去北来人自老 | 一七五 |
| 出發      | 一七九 |
| 水光接天    | 一八〇 |
| カステラ箱の蓋 | 一八三 |
| 船上の山羊   | 一八七 |
| アローハ    | 一八九 |
| 讀書三昧    | 一九一 |
| 硬軟七分三分  | 一九三 |

|           |     |
|-----------|-----|
| ウイルソン夜宴   | 一九四 |
| 飛電來       | 二〇九 |
| 白鷺再見記     | 二二二 |
| 契約尊重論     | 二二五 |
| 紐育の聴衆     | 二二八 |
| クリーヴランド   | 二三三 |
| 空港        | 二三四 |
| バラシユート    | 二三八 |
| 出發        | 二四〇 |
| 足なくして空を往く | 二三三 |
| ブライアン市    | 二三六 |
| 脚下百萬の燈光   | 二三八 |
| 市俄古       | 二四一 |
| 空中の手紙書き   | 二四三 |
| オマホー市     | 二四六 |
| 後返り       | 二四八 |

|    |    |    |    |    |
|----|----|----|----|----|
| 空  | 屋  | 徹  | 宵  | 三二 |
| 再  | 飛  | 行  | 三三 | 三四 |
| 寒  | 氣  | 骨  | を  | 刺  |
| す  | 三三 | 三五 | 三六 | 三七 |
| 渾  | の  | 盡  | き  | 三九 |
| 電  | 報  | 戰  | 二六 | 二七 |
| 人  | 生  | 畢  | 竟  | 一  |
| 賭  | 博  | 二六 | 二七 | 二八 |
| 飛  | 行  | 機  | 來  | ら  |
| ず  | 二六 | 二七 | 二八 | 二九 |
| 白  | 雲  | を  | 渡  | る  |
| 二九 | 三〇 | 三一 | 三二 | 三三 |
| 悠  | 々  | 砂  | 漠  | を  |
| 涉  | る  | 三三 | 三四 | 三五 |
| 一  | 高  | 寮  | 歌  | 二五 |
| 冬  | よ  | り  | 春  | 二六 |
| 危  | 機  | 一  | 髮  | 二七 |
| 二八 | 二九 | 三〇 | 三一 | 三二 |

米國山莊記

## 一 夏 の 味

たうとうまた夏になつた。

埃もたち、蚊も出る。しかし何と言つても東京の夏はいゝ。これだけの大きな都であり乍ら、町の中で蟬の聲が聞ける。到るところの青葉が風に搖れてゐる。夜は星の下に風が涼しく、晝は烈日の下に勇ましい雲の峰が湧く。一切の萬象が雄叫びして、天に向つて伸びてゆく。冬の間は、小さい蟲のやうに、あるか無きかの火鉢の火の傍に、ちぢかまつてゐた人々が颯と障子を一杯に開いて、大宇宙の呼吸の中に生息する。それでも足りないで、小さい家と狭い街から抜け出して、海と山と、大自然の懷の中へ躍り込んでゆく。

×

×

×

×

しかし、夏を悦ぶ、といふ氣持では、我々は亞米利加人には及ばない。亞米利加の夏位、壯快なものはない。夏といへば、自分はいつちも亞米利加を思ひ出す。

夏は、明るい、自由だ、開放的だ、活動的だ。冬の瞑想的なのと、春の享樂的なのと、秋の功

利的なものと異り、夏は無打算で、猪突的である。これは、年で言つて少年と青年の時代、國で言つて興つたばかりの新しい國である。我々は佛蘭西の春を愛し、支那大陸の秋を賞へるやうに、亞米利加の夏を禮讃する。

四月の中頃から、紐育<sup>ニューヨーク</sup>の町人の『出埃及<sup>エグジダス</sup>』が始まる。ホテルの客もアパートメント住ひの人も、下宿屋のたれ彼も、一齊に夏の往き場探しを始める。自動車に荷物を満載した人々が、新しい春服の袖を風に翻しながら、晴れぐとした顔をして、郊外へ！ 郊外へ！ と出て行く。五月の末までには、少しく餘裕のある人々の家庭は、散りくばらくに、海と山とに移つてゐる。六月には、もう夏の季節<sup>シーズン</sup>が精一杯に始まつてゐるのである。

冬の間は、狭い不自然な都會のなかに壓搾されて、押し合ひへしあひ息の詰るやうな生活をしてゐた人間共が、夏來る！ といふ聲を合圖に、まるでばつとばねにはじかれたやうに、田園の中へ跳ね飛んでゆく。誰れが留めたつて留まるものではない。しかもその數が、十萬や百萬どころではない。

現代米國の世相<sup>くふん</sup>を觀ぜんとする人は、紐育や市俄古<sup>シカゴ</sup>を見たのでは足りない。米國の生命は、都會になくして、小都邑と農村とにあるからである。冬の米國人生活を見たのでは足りない。夏

の亞米利加を見なければいけない。冬の間に力一杯金儲けをした亞米利加人が、夏になつて赤裸裸な本性に返つてゆくからである。

若し亞米利加が其生命を大都市に凝結した中央集權の國であるならば、我々は多くの望みを國の未來につなぐ要はない。羅馬の都に國家的勢力を集中した古代羅馬帝國没落の歴史を指させば足りる。若し米國が功利的な秋と冬の活動に全運動を托してゐるならば、我々はこの國の行く先を凝視する必要はない。カーセージや和蘭のやうな商業國民の末路を顧みるを以て足りる。

亞米利加の本當の力は、其地方分權的な社會慣習のうちにある。夏になつて山野の自然生活に歸つてゆく原始人的野性にある。冬の收穫は、夏の消費のためであるとする積極的な心境にある。さらには、何か新しいものを創造せずにはやまれないやうな、強い衝動の躍動のうちにある。

×

×

×

×

固より、亞米利加は未だアナトル・フランスを生まない。バルザックを生まない。戦後歐洲の作家のやうな廢頽的な情趣は、今日の亞米利加人には解らない。今日の亞米利加は、依然として、ミシシッピイ河の生活を描いたマーク・トウェーンの國である。強風山野に荒るゝ朝百尺の縦の梢に攀ちて、

『我れ未だ斯のごとき激動の歡喜を味はひたることなし。か細き枝頭は狂風にきしり、羽ばたき、前に屈み、後に彈ねかへり、上下左右に旋轉す。我れ全身の筋肉をこめてひしと枝頭にしがみ付きてあれば、身は葦の葉末にとまる米食鳥のごとく揺る』

と唄つた自然兒ジョン・ミューアの文情を謳歌した國民である。  
亞米利加の素描は、まづ亞米利加の夏から始まる。

## 二 田 舍 道

例によつて重いゴルフの袋を持つて、ブラザー・ホテルを出掛けた。抑もこのゴルフ道具なるものは自分に取つては重いついふ以外何の感じもない代物である。紐育から布哇まで、往復九千里の里程を、この道具を持つて歩いて、しかもたゞの一回も使はなかつたといふ自分である。亞米利加中この道具を擔ぎ歩いて、精々年に二回か三回しか使はない。にも拘らずいつか使ふだらうと頼むべからざるを頼んで、性懲もなくかうして持つて歩く。運動といふものは大切なものであるから、折があつたらしよう、といふ考へに中毒してゐる譯である。ゴルフの袋を擔いで旅行してゐる人を見掛ける度にあれも同類かと可笑しくなる。

x

x

x

x

今日もかうして使はない重い袋を擔いで出掛ける。出掛ける先はペンシルヴェニア州の山の中である。紐育の二十三丁目から大きい川蒸汽で對岸のホボークンに渡つて、ラカワナ鐵道に乗込む。九月初めの暑い日の午後である。もう夏場の人が、そろ／＼歸り支度をする頃と見えて、汽車の中は、六月ごろのやうな活氣はない。平凡な丘と川との景色を走ること一時間あまりにして、デラウエアー川の溪谷に出る。山漸く深く、水流次第に急なるところ、此邊一帯は紐育の人の別莊地である。とある小驛で汽車を降りて見ると、粗末な停車場の前に、亞米利加一流の藥屋——といふよりは雜貨店——が一軒あるだけ、がらんとして自動車の影すらない、爪先上りの赤い山土の路が、山の方へ消えていつてゐる。今汽車から降りた五六人の家族づれと一緒に例の重いゴルフの袋を氣にし乍ら、ぼんやり自分は立つてゐた。

「迎へにも来てくれないのか」

さう思ひ乍ら小驛の前を歩いてゐた。今日は、昨年以來の招待だから、布哇から歸り早々無理をして、こんな山奥まで來たのではないか。さう思ひ乍ら、少々不平だつた。しかし、外にも五六人の人がゐるのだから、どうかなるであらうと思ひ乍ら待つてゐた。

暫らくして、赤土の山路の上から、荷馬車のやうな大きい乗合自動車が降りてきた。ドヤドヤ

と我々が乗込んだ。ホテルの前で今度は小さいフォードに乗り換へて、小石のゴロ／＼する山路を、なほも山の奥へ／＼と進んでいつた。亞米利加には珍らしく手入れのしてない道で、車の轍が深く刻んでゐる、栗や櫟、樺、楓などの密林の間に、粗末な家が折々見える。飛んでもない處へ來たな。自分はさう思つて、ゴロ／＼する荷物を氣にしながら乗つて行つた。

密林をぬけて、廣い路へ出ると右手は眼界頓にひらけて、だら／＼降りの丘の彼方に、キャツキルの遠山が浮かみ上つてゐる。道の傍に聳える、高いポプラの梢に小さい葉がチラ／＼と涼風にそよいでゐた。

「これは少し、よくなつて來たぞ」

自分はさう思つて、少し機嫌をなほした。

×

×

×

×

フォードはガタ／＼と勢こんでこの廣道をゆくと見ると、やがて、ぐつと右に曲つて低い石の門を通つて、澁色煉瓦造りの二階建の家の前に停まつた。英國の田舎にあるやうな、落付いた好みの家で、高い樹の蔭に涼しさうである。窓の中に人影がちらと動いたと見ると、入口のドアが、ナ／＼と開いて、

「ハロー・カム・イーン」

といふ快活な聲と共に、黒鼠色の上衣に、白いテニス<sup>スラッ</sup>洋袴、白の半靴、ソフトカラー、無帽、といふ服装のリチャード・ウオツシボーン・チャイルド君の姿が現はれた。

「まだ怪我もしないでピン／＼してゐるのかね」

と、自分は籤から棒の挨拶をする。

「何故？」

と、流石<sup>さすが</sup>の彼も、一寸面喰つた貌だ。

「何故もないぢやないか。あんなに大掛りで犯罪事件を發<sup>おこ</sup>いてさ」

「うん、さうか。それなら大丈夫だよ」

と、何處か子供々々した顔に、靜かな笑みを含んで、彼がさりげなく答へた。

x

x

x

x

自分が自動車賃を拂つてゐるうちに、彼は自分の手荷物と、例のゴルフの袋とを輕々とさげ、先に立つて家の中に案内し出した。其時分には、自分の不機嫌は痕形<sup>あとがた</sup>もなく消えてゐた。

このチャイルド君といふのは、故ハーディング大統領の片腕と言はれた政治家で、つい近頃まで駐伊大使をしてゐた。今は米國で一流の政論家で、兼ねて小説家である。